月刊　岩小舎　8月号

■講習山行の記録

7 月 3 日(土)

基本ステップ／岳嶺岩　A1クライミングを学ぶ会

◆メンバー：小林英男(講師)、平林、向原侑希、伊藤幸雄、横川秀樹、山野昭人、山野美香、久野眞由美、伊藤由以、小林幸恵、斉藤典子、阿出川忍、伊藤栄子、伊藤稔、田中治男、福島彰男

◆記録　　：阿出川忍

2 年前初めて小ハングに挑戦した時、天井の 2 手目で敗退している私。それから 1 度も挑戦していませんでした。

でも、今回は 2 人の先輩の力を借りて最終点まで行くことができました。

1 人は M 香ちゃん、フィフィを上手に使った垂壁登りを見せてくれました。それまで「も～ダメ～」という時のお休み道具だと思っていたフィフィはあんなふうに使う道具だったんですね。目からウロコがぽろっと落ちました。もちろん、その後すぐ真似してみました。もう、バッチリ(？)です。

もう 1 人は Y 川さん、天井に残った 2 本のアブミの回収に手間取っていた私に、次にどうしたら良いのかを的確に指示してくれました。指示通りできなくても他の 1 手を教えてくれたり。Y 川さんの「ありがたいお言葉」がなかったら最終点まで行き着けなかったと思います。ありがとうございました。

最終点から見えた景色、忘れられません。
次は自力で登れるようになりたいなー。

【行程】
奥多摩駅(9:20)～岳嶺岩(10:30)～A1 クライミングトレーニング～終了(16:00)

【今月の目次】

■講習山行
岳嶺岩／A1クライミングを学ぶ会　1
岳嶺岩周辺／夏山サバイバル訓練　2
丹沢／水無川本谷下部・沖ノ源次郎沢　3
丹沢玄倉川／小川谷廊下　4
■山の学習帳 No.3　5
～磁北線の引き方その 3～
■自主山行
藤坂ロックガーデン　RCT　6
笛吹川東沢／ヌク沢左俣　6
笛吹川東沢／鶏冠谷右俣　7
奥多摩北秋川／惣角沢　8
北穂高岳東稜　8
奥多摩北秋川／シンナソー・ヒャマゴ沢　9
奥多摩北秋川／水ノ戸沢　10
丹沢四十八瀬川／勘七ノ沢　11
南紀／果無山脈縦走　12
丹沢玄倉川／女郎小屋沢　13
丹沢玄倉川／モチコシ沢　14
■今月の TIPS No.5
～声が届かないとき～　12
■長谷川カップへの道～その 1～　16
■こちら技術委員会　16
■編集室だより＆会員一言集　18
■7 月の山行一覧・9 月号の予定　19

ｊｊｊｊｊｊ ７月４日(日) ｊｊｊ

基本ステップ／岳嶺岩周辺　夏山サバイバル訓練

ｊｊｊ

◆メンバー：金沢和則(講師)、工藤寿人(講師)、矢田実、松本善行、坂口理子、沢口千鶴子、伊藤幸雄、横川秀樹、山野昭人、山野美香、福田洋子、久野眞由美、南谷やすえ、伊藤由以、日浅尚子、浅村和史、黒田記代、阿出川忍、伊藤栄子、伊藤稔、田中治男、福島彰男

◆記録　：黒田記代

例年どおり夏山サバイバル訓練が、金沢・工藤講師を含め総勢23名の参加のもと実施された。

メンバー表の奇数組と偶数組の2班に分かれて訓練開始。

訓練開始に先立ち、松本同人指導の下、研修参加の3名（浅村、伊藤栄、黒田）は、懸垂下降用と自己脱出用のロープを６本セットする。

午前の部：懸垂下降あれこれ、自己脱出

午後の部：トップ墜落の衝撃体験と確保側からの脱出、沢での徒渉とロープワーク

の時間割で訓練が行われた。

①懸垂下降あれこれ

エイト環使用・未使用での懸垂下降と下降途中での仮固定の練習。

②自己脱出（自己吊り上げ）

プルージック2本による脱出訓練。その他、マッシャーやタイブロック、その他確保器での登高検証が行われた。

③トップビレーの再確認とトップ墜落の衝撃体験、確保側からの荷重の移し換えによる脱出方法

確保器の仮固定（エイト環、ETC など）とプルージック、マリナーノットによる荷重の移し換えの練習。

④沢での徒渉とロープワーク

スクラム徒渉、固定ロープの使い方、流された者の回収等の訓練。

全体の訓練内容は例年どおりでしたが、各人の習熟度に応じて訓練が行われました。各自それぞれ自分に足りないことの確認も出来たと思います。多数の研究生のバックアップの下、とどこおりなく訓練を終了することが出来ました。

わが班が沢の訓練に入るための準備をしていると、班長の横川さんがライフジャケットを持ち出したかと思うと、伊藤幸さんが私にしっかり装着してくれました。私がカナズチであるのを覚えてくれていたようです。ありがたいことです。沢に入って、との皆様のたってのご希望に従って、水に浸かって流されてみます。必ず浮くとはいえ、水が怖いことに変わりはありません。念のためロープを着けてもらって流されてみます。確かに浮いていますが、体が反転して一度顔が水に浸かってしまいました。怖かったけど、浮いているので自分で反転し、顔を水から出すことが出来てほっとしました。顔さえ水に浸からなかったら平静心を保てるのですが。水に落ちても、顔・頭が水に浸からずにすむ装備が欲しいですね。必ず浮く安心感は心の余裕を生み、あわてててバタツカズにすみますね。でもまだまだ水が怖いです。沢訓練項目終了までライフジャケットを装着してました。横川さん心遣い有難うございました。

ｊｊｊｊｊｊ 7 月 24 日(土) ｊｊ

基本ステップ／丹沢　水無川本谷下部・沖ノ源次郎沢

ｊｊ

◆メンバー：工藤寿人(講師)、伊藤由以、日浅尚子、阿出川忍、小林幸恵、伊藤栄子、斉藤典子、伊藤稔、浅村和史、福島彰男、池田松野、松永己幸

◆記録　：池田松野

8 月の剱合宿の参加条件として、水無川本谷下部での懸垂下降の練習と沖ノ源次郎沢での登攀訓練があるとのこと。本科に入学したばかりの私は合宿には参加したいけど剱沢ってどんな所？　体力は大丈夫？　等々悩んでいた。でも、兎に角“行ってみなきゃ始まらないでしょっ”と新品だらけの 9 ミリ 50m ザイル、テント、マット、炊事用具一式、登攀用具を背負って家を出た。白状しますがザックの重いこと。駅の階段は手すりから手が放せなかった。

渋沢駅で今まで遠足倶楽部でお世話になっていた皆さんの顔を見てホッと一息、メンバーの車に分乗して戸沢出合へ。身支度を整えて、生まれて初めて自前のザイルをザックに入れ、心の中で気合いを入れて出発する。

沖ノ源次郎沢出合を過ぎてゴーロ歩きとなり、石の上をヒョイヒョイと歩いて行くと沢歩きの楽しさが増してくる。10 分も歩くと本谷下部の最後の堰堤が出てくる。左に鎖のついた巻き道があるがコンクリート左端の鐙のように結んであるザイルに足をかけて腕力で乗り越える。水無川本谷は何故か滝にみんな鎖がついていて安心だけど、少し物足りない。

今日は沢下降がメインだから怪我だけしないように気を付けて慎重に登る。F5 は右壁に斜上する鎖がついているが、鎖を固定する鉄杭が抜けていたり、鎖とスタンスの間が狭かったりといやらしい。工藤講師が「ザイル出そうか。」と言う。私は「大丈夫ですよ。」なんて安請け合いしたが、工藤講師は「ここは出そう。」と言う。私のザイルの初仕事だ。エーデルワイスの紫が光っている。取り付いてみると本当に登りにくい。1m 程滑り落ちた人もいたし、判断力の大切さを思い知った。

沖ノ源次郎で登攀訓練。2 年次生がリードで登る。石がボロボロとはがれて大変そうだった。工藤講師が登っていくと 18cm×12cm×9cm の浮き石があった。「この石どうしよう。」「工藤さん持っていって。」「お腹のとこに入れてって。」「ここに置いていくから気を付けて。」なんて楽しい会話が終わり、私が登っていくと正にそこしかないホールドにその石が鎮座していた。“えっ、私はどこをつかめばいいわけ。”

その後本日のメイン本谷の懸垂下降をする。懸垂下降は支点を見つけザイルをセットするのも大変だけど、一人一人がセルフビレイをとる、ハーネスの装着の確認、ザイルを通したエイト環をつけたビレイループのカラビナの安全環がしっかりしまっているか毎回必ず点検することや、冷静にルートを見極めて支点やザイルにショックをかけずにいかに安全に下降するかなど、もっともっと練習しなくちゃと思った。懸垂下降はとても時間がかかることも知った。

ともあれ一日が終わり、伊藤さん、横川さんに合流したキャンプサイトは楽しかった。

【行程】
水無川本谷遡行　戸沢出合(10:10)～沖ノ源次郎沢出合(12:45)
沖ノ源次郎沢登攀訓練(12:50)～(14:30)
水無川本谷下降(14:30)～戸沢出合(17:30)

◇本科 24 期生　紹介◇
福島　彰男さん／東京都(5 月入会)
池田　松野さん／東京都(6 月入会)
増田　義人さん／滋賀県(6 月入会)
神森揮要子さん／東京都(7 月入会)
松永　己幸さん／東京都(7 月入会)

ＪＪＪＪＪＪ 7 月 25 日(日) ＪＪＪ

基本ステップ／丹沢玄倉川　小川谷廊下

ＪＪ

◆メンバー：工藤寿人（講師）、小松清貴、南谷やすえ、久野眞由美、日浅尚子、小林幸恵、伊藤栄子、斉藤典子、伊藤稔、浅村和史、田中治男、福島彰男、池田松野、松永己幸、みどる１名

◆記録　：浅村和史

モチコシ沢へ行く渡部/伊藤/横川組を見送った 6 時ごろから 9 時の出発までに、小川谷へ行くと思われるパーティが何組も入渓していった。自分たちは 15 人、後から来るパーティには何回もの待ちが発生するに違いない。実際 4-5 組に追いつかれ、抜かれたりそのまま渋滞状態のまま最後(駐車場)までいってしまったりした。

小川谷は…浅かった。去年の話など聞くと何度も何度も泳いで岩にとりつき、シャワークライムをし、滑り降りるはずだったが、腰まで水につかることもあまりない。聞いてみるとかなり埋まってしまっているようだった。淵や釜が埋まった沢がまた深くなるにはどれほどの時間がかかるのだろう。埋まるのはすぐなのに深くなるには時間がかかるなら、どの沢も浅くなるはず。大雨が降ると大きな岩も転がり沢の様相が全く変わってしまうこともあるのだから案外すぐに深くなることができるのだろうか。それとも侵食によって山の全体的な形状が変化できるぐらいの長い時間的スケールを必要とするのか。しかし、目の前の沢は浅く(なったといわれており)、それが今日深くなることはまずないので、気を取り直して進む。

途中、後から来たパーティの一人(外国人)がハングした滝を登ろうとしていた。高さは 4-5m か。水流に直撃されながら水面上に顔を出し、横の岩に片手をつっぱり、片足も同じところにかけ…2 回失敗したが 3 回目で登ってしまった。やればできるのか、と感心した。

ゴルジュ地形の中ではほとんどの場所で流れの中を直接進むか、横の岩(石)の上をバイパスするかを選択できた。僕自身はできるだけ流れに入っていったが、少し濡れるだけの遡行も可能だろう。しかし、もちろん小滝はあり、ルートを選べば水圧に抗って登ることもできる。上流には深い釜も数箇所あった。結局面白そうなルートを選びながら登った。

【行程】
駐車場(9:00)～小川谷廊下入渓(9:30)～遡行終了点(登山道)(15:00)～駐車場(16:00)

お知らせ

無名山塾・本科(登山学校)のご案内

無名山塾・本科は自立した登山者の育成を目的とし、2 年間で岩・沢・雪の基礎的な技術(48 単位)を取得して頂きます。入会申し込み、お問い合わせは、無名山塾事務局まで電話、FAX、ハガキ、E メールで。

〒170-0005　東京都豊島区南大塚 1-39-2-1F
TEL:03-3941-3481(平日 10 時-18 時)　FAX:03-3941-3482
メール:ZUA11617@nifty.com
入会金：10,000 円、年会費：12,000 円
山岳保険料：8,000 円（4/1～3/31）

◇◆◇ 山の学習帳 No.3 ◇◆◇

【磁北線の引き方 その 3】

前回、前々回では、分度器を使わずに正確な磁北線を記入する方法を紹介しました。磁北線最終回の今回は、磁気偏角の地理的・時間的な分布について紹介します。

地理的な分布：磁力線の方向が真北の方向に対して偏る角度が磁気偏角ですが、現在の日本では唯一の例外である南鳥島を除いて、全て西に偏っているため「西偏」と呼ばれています。西偏の一覧図は国土地理院のホームページで公開されています。一覧図を見ると、西偏の分布の傾向が良くわかります。西偏は、緯度が高くなる、すなわち北に行けば行くほど大きくなります。しかしながらわれわれ無名山塾会員のよく出かける山域、南から丹沢、南アルプス、奥多摩・五日市、奥秩父、八ヶ岳、西上州、日光・足尾、北アルプス、谷川は比較的狭い範囲にとどまっており、若干緯度の効果は見られるものの、残念ながら利用できるようなはっきりした傾向はありません。

山域	西偏の平均	平均した地図の枚数
丹沢	7° 02′	5
南アルプス	6° 10′	3
奥多摩	6° 55′	8
奥秩父	6° 27′	3
八ヶ岳	6° 30′	5
西上州	7° 13′	3
日光・足尾	7° 06′	5
北アルプス	7° 00′	5
谷川	7° 38′	4

時間的な分布：地磁気を測量する地点を磁気点といいますが、一等磁気点だけでも全国の100ヶ所に設けられています。一等磁気点のうち 20 点を基準磁気点とし 2 年に 1 回測定し、そのほかは原則として 5 年に 1 回測量しています。現在使われている西偏の値は 2000 年に測定された値です。定期的に測量しなければならないのは、磁気偏角が時間的に一定ではなく、地球の内部や太陽など外部の活動により、日時を追って少しずつ変化しているためです。変化の早さは 1 年に2′ 程度の割合です。地形図上の偏角の表示は 10 分単位で表示されるので、5 年経つと 10′ もの変化がおこり、記入される西偏も変わることになります。例として、2 万 5 千分 1 地形図の「東京西部」では 1990 年代は西偏 6° 50′ 、1980 年代は 6° 30′ 、1970 年代は 6° 20′ の値が示されています。伊能忠敬が測量をやっていた 1800 年頃は、江戸の西偏は殆ど無かったそうです。それ以前の約二百数十年間の東京付近の偏角は東偏を示していたことが地磁気学の分野の研究で実証されています。さらには磁極の南北が入れ替る磁場逆転が、過去複数回起こったという証拠もあると、高校の地学の授業で習ったことを覚えています。

地形図の一枚一枚には西偏が記載されていますが、単にほぼ中央にあたる地点の偏角の値が示されているにすぎません。手元にある地図でも、隣り合う 2 枚の地図「茂倉岳」と「水上」では 40′ もの違いがあります。地図の切れ目でいきなり変化するはずもありませんので、一枚の地図中でもかなりな違いがある事は明白です。時間的な変化があることも考慮すると、極端な間違いをしない限り、磁北線の記入にはあまり神経質になる必要は無いと言えそうです。

（研究生・山野昭人）

お知らせ

メーリングリストのご紹介

無名山塾の本科、研究生、同人、講師の連絡用に sanjc2004 メーリングリストが運営されています。

現在、本科生 10 人、研究生 12 人、同人 4 人、講師 3 人が登録しています。登録がまだお済みでない方は是非登録の申し込みを下記アドレスまでお願いします。 sanjc2004@yahoo.co.jp

■自主山行の記録

7 月 10 日(土)

藤坂ロックガーデン　RCT

◆**メンバー**:　伊藤幸雄(L)、伊藤栄子
◆**記録**　　:伊藤栄子

センタークラックをリードしてもらい、続いて登攀したが 5mくらいの所でポコとした感じのちょっとしたハングを、セカンドなので直登したが、トップの場合絶対に真っ直ぐには行けないと思った。

つぎにトップロープにし、ミニットマンを登ったが大変にきつく、斎藤氏(*)は「皆さん、なかなかルートどおりに登ってくれない」と言われるが、自分がこの岩場をこなせるようになるには、藤坂に通い詰めないと無理！無理！

非常に暑く、気力、体力が持たない為に早々に終了した。また、暑さの厳しい時期は避けた方が良いと思った。

【行程】
車にて現地(9:30)～終了(お昼)
(*)藤坂ロックガーデンの管理者

7 月 10 日(土)

笛吹川東沢／ヌク沢左俣

◆**メンバー**:横川秀樹(L)、山野美香(SL)、田口浩昭、山野昭人
◆**記録**　:山野美香

久々にそろった同期4人。なんだか嬉しくて顔がニヤケてしまう・・。

出合に着くころには時々薄日が差し始めたものの、木々に覆われていてやや暗い中を遡行開始。

小滝・ナメ滝・ナメを順調に進んでいくうちに急に目の前が明るくなったと思ったら、強い日差しを受けて光り輝く巨大な真新しい堰堤。もしや階段やハシゴがないかと近くまで行ってみるが期待は裏切られた。少し戻り左斜面を高巻きはじめるが、かなりの急斜面で慎重に登る。やっとのことで堰堤の上まで出て、そこから懸垂で降りられないかと支点となりそうな木を探すが適当なものはなく、さらに進み今度は急斜面を熊笹を束ねて掴みながらなんとか降りた。

ホッとしたのも束の間、急にたくさんの倒木に行く手を阻まれ一瞬怯んだ。進路を間違うはずはない…。右斜面が崩壊し、なぎ倒された木々が沢へと流れ込んでいたのだ。

一難去ってまた一難、先へ進むとまた堰堤そしてまた…結局5つの立派な堰堤を越えなければならなかった。そこから先は手頃な滝を敢えて難しいルートを選んで登ったり、ナメ滝を滑らないように用心しながら進んだりと皆思い思いに遡ること 30 分程で、いよいよ本日のハイライト 3 段 260m 大滝の下段が見えてきた。

大きい！丹沢や奥多摩の滝とは比べものにならない程のスケールで、快適に登ることのできる傾斜と緩やかな水の流れが 100m ほど続いている。とはいうものの距離が長いだけに息を弾ませながら登りテラスに到着すると、今度は巨大な大滝中段を正面に仰ぐことになる。が、それは中段の半分くらいしか見えておらず、さらにその先には中段の上部分そして上段と続いていると思うとなんだかドキドキしてくる。

3 つ程あるルートのうち水量の多い左ルートを選びリードし始めてまもなく、右足に鞭のようなもので叩かれたような痛みが走った。肉離れのようだったので一旦テラスに戻り、横川リーダーにバトンタッチして木陰で足の手当てをしていると突然雷の音が…。協議の結果残念な

がら撤退することになり、途中何度か懸垂を交えながら雨脚の強まる中下降を開始した。またあの堰堤を越えるかと思うと少し憂鬱だったが、ほとんどの堰堤を纏めて越えられる登山道が通っていて楽に下降することができた。次回リベンジ遡行の際は堰堤の高巻きをする必要がないことが分かってホッとした。

小雨の降り続く中、近丸新道を下山し、無事西沢渓谷駐車場へと戻った。

またまた負傷でメンバーには迷惑をかけて申し訳なかったが、なにはともあれビールで乾杯！

【行程】
西沢渓谷駐車場(6:30)～ヌク沢出合(6:50)～右俣分岐(9:40)～大滝中段下(10:50)
撤退開始(11:20)～駐車場(15:40)

7 月 11 日(日)

笛吹川東沢／鶏冠谷右俣

◆**メンバー**：横川秀樹(L)、田口浩昭、山野昭人
◆**記録**　：横川秀樹

鶏冠谷の出合は狭くて暗い。この先、どんな渓が広がっているのか、不安と期待が入り混じる。

まず出会う大きな滝は魚止めの滝 10m。これは右から簡単に越える。

奥飯盛沢の岩盤を過ぎると 3 段 12mのナメ滝。左スミから攻め上がり、上部は草つきをトラバースしたが、あまりよくない。これは右側を巻いたほうが良かったのかもしれない。

前半のヤマ場となる逆「く」の字の滝は 20mのナメ。残置ピトンと残置スリングが豊富にあるが、一見してかなり傷んでいるものがあるため、慎重に登った。

そうこうするうちに二俣に到着。出合から 2 時間 20 分が経過。

右俣への分岐は、いったん左俣に出て、間の尾根を大高巻きする。今回の遡行では、ほかにも数回の高巻きを強いられた。

余談になるが、滝の登攀が「攻め」の技術なら、高巻きは「守り」の技術であり地味な技術である。

そのため、好き好んで高巻きをする人はあまりいない。しかし、数を重ねない限り、この守りの技術を自分のものにすることはできない・・・。(これが高桑信一氏の受け売りだと気づいたあなたは相当な沢通だ)

さて、上部がナメとなっている 30m滝も左から高巻き、「守り」の技術にさらに磨きをかけつつ、その後は、快適なナメを楽しみながら進み 40m大滝の下に出る。これにて遡行終了。大滝手前の左岸のルンゼに入り、すぐに右の支尾根へ向けてかすかな踏み後をなるべく忠実にたどっていくことで、あまり藪漕ぎすることなく 45 分で登山道(標高 2000m 付近)に出る。帰りは徳ちゃん新道を使うが、近丸新道よりこちらのほうが下りやすく感じた。

【行程】
西沢渓谷駐車場(5:20)～出合(6:04)～二俣(8:26)～40m大滝下(10:50)～登山道(11:38)～西沢渓谷駐車場(13:35)

JJJJJJ 7月11日(日)JJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJ

奥多摩北秋川／惣角沢

JJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJ

◆メンバー：伊藤栄子(L)、渡部吉実、伊藤幸雄、南谷やすえ
◆記録　：伊藤栄子

武蔵五日市駅集合時、快晴、沢日和で出発。林道終点まで行ったが回転場になっていて、駐車禁止の為、少し戻って広くなっている所に駐車した。

ルート集で説明しているように、非常に整備されている。

やはり暗くて苔が多く、岩が結構滑る。

F1 に先行パーティーが取り付いていた為、行程が長いことを考慮して、左高巻きをした。

F2 斜上バンドとなっていたが、I 氏、左をへつりながら登り、M女史、左高巻きで進み、W氏、右高巻き偵察をしたが、岩も脆く足元も不安定で停滞となりロープを出し登攀する。すこし触っただけの 60～70cm 大の岩が釜に落ちた時はW氏が落ちたのかと思うほどの大きな水音だった。

F3 は左を登り、問題なく通過し、F4 はツルンとした感じで右巻き道を進んだが、少し前より雷がなり始めて空模様が怪しくなってきた為、下山することにした。

沢から 5m位登ると仕事道があり、歩き始めると同時に凄い勢いで雨が降り出した。バス停で着替え、車に乗り込みしばらくすると、1cm 程の雹がフロントガラスを叩きつけ下山のタイミングが良かったことに胸を撫で下ろした。

F4 までだったが、楽しい雰囲気があったので、リベンジしたいと思っている。

【行程】
入渓点(9:30)～終了(10:45)

JJJJJJ 7月17日(土)～19日(月) JJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJ

北穂高岳　東稜

JJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJJ

◆メンバー：横川秀樹(L)、田口浩昭
◆記録　：横川秀樹

『前穂北尾根』と『奥穂～西穂』。

今回は、3連休ということもあって、穂高での「初級クライミング」＆「ややハイグレードな縦走」という一粒で二度オイシイ計画を立てた。

参加者は、山野(美)SLと田口、日浅、私の研究生4人。(敬称略)

おっと、ここまで読んだあなたは、自主のタイトルやメンバーが、何だか食い違っているなぁと気付いたことでしょう。

そう･･･、一週間前のヌク沢左俣 260m大滝でのこと。水流を浴びつつ果敢にリードする山野SL、ずり落ちて太もも負傷。(P6 参照)

これでメンバーが 1 人減り、3 人になったかと思いきや、日浅女史が男 2 人女 1 人というパーティー編成に身の危険を感じ(？)突然のキャンセル。

ということで、男 2 人となり装備計画など最初からやり直しての出発となった。

さて、初日は涸沢へ入るだけという余裕の日程。午前中に到着したので、しばし休憩後5･6のコルまで偵察しようと思ったが、雨が強くなりテントに閉じ込められる。結局、フライシートを叩きつける激しい雨音は翌朝まで止むことがなかった。

二日目朝、テントの中まで浸水した豪雨にかなりやる気の失せた我々二人。きょうは北穂東稜でお茶を濁そうということになる。トポはないが、雨でも行けそうだし、テントと余分な荷物は置いたままサッと行ってサッと戻って来よう･･･。

でも、その前に前穂北尾根の取り付きだけは

確認しておきたいので、雪渓から5・6のコルへの道を辿ってみることにした。北尾根の上部はガスで隠れているので、どれが 5・6のコルかよく分からなかったが、少し行くとガレのジグザグの踏み後を発見。なるほど、これを辿れば5・6のコルか・・・。アイゼンは不要なことを確認した。

一仕事終え、小雨の中、北穂東稜へ向け出発。私が記憶していた情報は『北穂への一般道(南稜)を歩き、鎖場の手前でトラバースし最低コルを目指す。あとは岩稜をリッジ通しに行く』というもの。

しかし、何しろ、ガスで視界がないので、どこをトラバースすればいいのか皆目見当もつかない。一旦鎖場まで行って、また戻り、「まぁトラバースするとしたらこの大石の散乱しているあたりしか考えられないなぁ」と思っていると、ヘルメットをした 3 人パーティーが目の前にいて、ちょっと安心。

登攀具を付け、ここから雪渓を 100mほどトラバースし、続いて急なガレ場を登っていく。二股を右のルンゼに入り、濡れた岩を攀り稜線へと出る。あとは、右に明瞭な巻き道もついているが、そこを行くと何のために来たのか分からないので、なるべくリッジ伝いに行く。濡れているのでそれなりの緊張感がある。しばらくすると、ちょっとイヤなところに出た。岩の左側にはり出した幅 20cm ほどのテラス状の部分に一歩を踏み出すだけだが、その下はスッパリと切れ落ちている上、手がかりもない。落ちないだろうが落ちたら助からない。ここは結局ロープを出すことにした。取り付きで会った 3 人パーティーを途中で抜いていたのだが、彼らはここを手前から巻いていったので、再び抜かれてしまった。

この先少し行くと、3 人パーティーがロープを出していたのでしばらく待ちだ。ここで再度我々もアンザイレン。ナイフリッジを辿り、高度感のある 2～3mほどのフェースを乗り越える。その手前が 1mほどクライムダウンしなければならないので何ともスリリングだ。そのあとも、もう 1 ピッチ、スタカットで進み懸垂支点へ。10mほど下降して核心部は終了した。どうやらここまでが『ゴジラの背』だったようだが、視界がなく全貌は見えずじまいだった。

この先は、特にどうということもなく岩と遊びながら進み標高 3000mぐらいになったら巻き道へ。するとゴミだらけの地帯になり、ほどなく右から縦走路が合流した。

さて 3 日目は、前穂北尾根から岳沢経由で上高地へ降りようと思っていたが、夜中からまたまた雨。天気には勝てない。すごすごと上高地へ撤退した。

【行程】
7/17 上高地(6:45)～涸沢(11:35)
7/18 涸沢(7:00)～東稜へのトラバース地点(8:45)～北穂小屋(11:30/12:00)～涸沢(14:10)
7/19 涸沢(6:45)～上高地(10:30)

7 月 17 日(土)

奥多摩北秋川／シンナソー遡行・ヒャマゴ沢下降

◆メンバー:伊藤栄子(L)、久野眞由美(SL)、南谷やすえ、福田洋子
◆記録　:福田洋子

北秋川の藤倉にはその名も「ヒャマゴの里キャンプ場」がある。駐車場は集会所にもあったが我々はキャンプ場をお借りした(1 日 1000 円)。

管理人の方に話しを伺い沢に降りる場所を教わった。出合はホントに小さく、上の道路からでは気付かない位だ。

すぐに 3mの小滝、そのままゴルジュとなり小さな釜、小滝と続く。緑の苔がきれいで人はあまり入らないようである。2 段 6m・2 段 9mいずれも傾斜は緩く岩がしっかりしているのでキチンと足を乗せれば問題無い。

ゴルジュを抜けてしばらくは沢歩き、気分はおおいにユッタリだ。

クラック状 3 段 15mを見た時は、さすがに高さがあるし遡行アドバイスには「直登はおぼつか

ず」とあるので巻こうと言う事になった。巻きをどこからするかで偵察で 1 段上るがこの段からでは無さそうで次の段を上り、ここから巻くのなら直登出来そうで難なく上に着いてしまった。巻きの方がよっぽど悪かったようだ。その後は沢を忠実につめてほとんどヤブもなく左の尾根に上がると一本松に向かう登山道に出た。

お昼を食べながら地形を確認、お隣のヒャマゴ沢の下降に移る。微かな踏み跡があり、それを辿るが結構な倒木帯、やっと落ち付いたかと思うとザレの急傾斜となりここはザイルを出して懸垂下降 2 ピッチ。傾斜の落ちたところで水線に合流。

小滝を交えながら下るがいずれもクライムダウンできてザイルを出すほどの所も無く下降をしているとワサビ田跡に続くいきなりの堰堤、これはザイルかと思いきや左岸に仕事道がありもう一つの堰堤もそのまま越えて出たところには私達の車がおとなしく待っていてくれた。

【行程】
ヒャマゴの里キャンプ場(9:45)～シンナソー出合(9:50)～登山道(12:00)～ヒャマゴの里キャンプ場(14:00)

7 月 18 日（日）

奥多摩北秋川／水ノ戸沢

◆**メンバー**：伊藤栄子(L)、伊藤幸雄(SL)、南谷やすえ、福田洋子
◆**記録**　：福田洋子

昨日のヒャマゴのキャンプ場と打って変って大変な賑わいを見せている神戸のキャンプ場を後目に林道終点まで車で入る。身支度を整えいざ出陣だ。

林道を少し戻り適当な所で沢に降りる。今日の岩や苔は滑るかな？　やはり最初は様子を伺いながらの足捌き。水量は昨日より多そうだ。

女性陣 3 人は昨日のクモの巣との格闘に懲りていた為、なにげにトップをユキさんに譲りトポトポとついて行く。がしかし、そこはユキさん、昨日はゴルフで焼かれていた為かしきりに水を求めて水線を「行け行けドンドン」。しだいテンションもスピード上がり気が付けばゴルジュの中、釜を持つ 3m滝を 2 つへつって越えてF3(10m)の上に立っていた。(う～ん、泳いで取り付くはどこ行った、核心部はザイルを出して貰おうと密かに思っていたのに自分がトップで登っちゃうし)

その後は藪のうるさい所など作業道を利用して巻いたり水線に戻り小滝を越えていく。大岩の二俣を越え少しするとワサビ田が次々と現れる。きれいな水はみんなワサビ田に持って行かれているようで、その脇の大きなゴーロを全身を使って進むことになり暑い。

滝の無いままワサビ田だけがしばらく続く、「よく管理されてるな～」と思っていたらシッカリした作業小屋が出現。人はいないけどカップラーメンやら何やらが散乱している。(ワサビ作る人が沢を汚していいのか？)

ワサビ田も終わり、だんだん源頭らしくなってきた所で左のルンゼ状より支尾根に上がる。傾斜のゆるい所を読みながら、フーフー言って登るとやっと湯久保尾根に到着した。

下山は車の回収の事もあり、エアリアには載っていないが地形図にあるクロノ尾山から派生する中尾根の仕事道を使ってみる。途中、一ヶ所まちがえそうになったが良く踏まれた道でキャンプ場のど真ん中にきたない四人は踊り出た。

あれ！私はどこで手(指)を捻挫したんだっけ？そうそう、単なるゴーロ歩きで岩に手を付いていたら足下がすべって残った手がグキッといったんだから 10m滝の前よね。遡行中はたいした事ないと思っていたけど後からしっかり腫れてきました。結果は翌日の勘七ノ沢と翌週の沢集中をパスすることになり、後日どうせ沢に行けないからと沢シューズのフェルトを張り替えて貰うべくお店に行ったら、言われました、「良く使ったねー、こんなに減ってたら滑ったでしょ。フェルトの寿命は 20 日(20 本では無いらしい、泊まりの沢もあるから)だよ、下降にも履いてるようじ

ゃそれより短いよ」ですって。みなさんにはケチらずに早めのフェルト張替えをお薦めします。

【行程】
林道終点(9:30)～10m滝上(10:15)～二俣大岩(11:45)～湯久保尾根(13:15)～クロノ尾山(14:00)～キャンプ場(15:30)

7月19日(月)

丹沢四十八瀬川／勘七ノ沢

◆メンバー:伊藤栄子(L)、南谷やすえ(SL)、伊藤幸雄、久野眞由美
◆記録　:久野眞由美

連日の猛暑、この日も東京 35℃の真夏日。3連休、人気のある沢なので混雑(?)も懸念されましたが、意外にも沢で出会ったのは単独行の 1 名のみでした。

二俣の駐車地点には、既に 6 台ほど駐車されていました。滝場が混むかも・ロープを何度も出し入れするであろう・沢の藪はうるさくないだろう・ロープワークの練習も、という事で、伊藤氏の提案により、2 人 1 組のコンティニュアスで行く事となりました。

伊藤(栄)＆南谷、伊藤(幸)＆久野とそれぞれ二俣からロープを結び、入渓。

F1(5m)、初っ端からドウドウ落ちる水量のある滝に、一瞬、気圧されそうになりますがいざ取り付いてみると、見た目よりホールド・スタンスはしっかりありました。

F2(7m)をサクサク越え、大きな堰堤を越え、しばらく穏やかなゴーロ歩き。F3(8m)は、ウォータースライダーが出来そうな滑り台状で、深い釜を持つ滝。左側をトラバース気味に越えました。後で花立山荘・小屋番の方の話で、ここはホントにウォータースライダーで釜にドッポ～ン！と遊べる所なのだそうでした。(残念！)

F3 の後のナメは、水底の岩の色を映してなかなか水が綺麗でした.この頃には、最初ぎこちなかったコンテの動きもスムーズになってきました。

F4(2 段 12m)の上段は、右側の土混じりの凹部を登ります。この途中に打ってある首の長いハーケン、これは伊藤(幸)さんの打ったものです。水音が大きくて、ハーケン打っていた音が聞こえず、セカンド以下誰もが既に打ってあるものと思いこんで、ランナーしか回収してきませんでした。(伊藤さん、ごめんなさい・・)

堰堤を 5 つ越えて、いよいよF5(15m)の大滝。左のバンドから取り付いて、水流沿いに直上ですが、これも見た目よりははるかにいい具合のホールド・スタンスがありました。
リードのビレイにもちょうどいい所(登り口に転がっている大きな岩)に、しっかりボルトが打ってありました。

この先は小滝の連続で、暑いので水を心地良く被りながら(というか、わざわざ水線を狙って？)歓声を上げながらの楽しい遡行。真夏の沢は、やっぱりこれです！

花立への詰めは急傾斜の狭いガレ。入渓から終了点・花立山荘までずっとコンテで通したので、この土混じりの浮き石の多いガレでは、落石を誘発しないようなロープワークの良い勉強になりました。

勘七ノ沢、藪がうるさくないので、コンテの練習にはちょうど良かったと思います。今回、滝場で混む事は無かったのですが、混む沢では条件さえ許せば、こういうコンテでスピーディーに行動するのも一法か、と思いました。

【行程】
西山林道・二俣(9:30)～F1(9:40)～F5(12:00)～大倉尾根・花立山荘(15:15)～堀山ノ家経由二俣(17:00)

今月の TIPS (No.5)　～声が届かないとき～

これから本番ルートへ行こうというとき、登る前にパートナーと必ず打合せておかなければならないことがあります。それは、声が届かないとき(聞こえないとき)どうするかという点です。

では、この問題を考える前に、通常のコールを、念のため、確認しておきましょう。

①トップ:「登ります」　②セカンド:「どうぞ」
③トップ:(終了点で)「ビレイ解除」　④セカンド:「解除しました」
⑤トップ:「ザイルアップ」　⑥セカンド:「ザイル一杯」
⑦トップ:「登っていいよ」　⑧セカンド:「登ります」

このうち、①と②は、登る前ですので問題ありませんし、⑤と⑥は省略してもさほど不都合はおきません。

また、意外と思うかもしれませんが、⑦と⑧も省略が可能です。なぜなら、セカンドが一歩登ってロープが張られるのを確認し、もう一歩登って、さらにロープが張られるようであれば、ビレイはできていると考えて99.9%間違いないからです。(逆に言うと、ロープが張られない限り、絶対に進んではいけない)

さて、そうなると、論点は③と④に絞られてきました。つまり、今、ここで論じている問題は『ビレイ解除』のコールが聞こえないときどうするか、ということなのですよ。

さて、この回答は、たった一つです。

トップは、終了点について、声が届いてないようだと感じたら、ザイルアップをせず、そのまま確保器をセットして、引上げる。一方のセカンドはロープが一杯になったら登り始める。(もちろん、上で述べた通り、一歩ずつ、ロープが張られるかどうかを確認することが大事)。

これで、本当に大丈夫なの？と感じたアナタ。なかなかいい勘をしています。もしもトップがまだ登っている場合(通常の長さのロープでは考えにくいことですが)、セカンドも登り始めるわけですから、コンティニュアス(同時登攀)になります。しかし、ここでトップが落ちたとしても、プロテクション(ランニング・ビレイ)を取っているわけですから、そこで止まります。また、セカンドが落ちた場合、トップも引きずり落とされるかもしれませんが、やはりプロテクションで止まるので大事には至りません。

ということで、声が届かなくても、この方法で登り続けることが可能になります。声が聞こえないため、ず～っと待っているという初心者にありがちな失敗をしないようにしましょう。

(研究生・横川)

7 月 18 日(日)～19 日(月)

南紀／果無山脈縦走

◆**メンバー**:黒田記代(L)、斉藤典子、阿出川忍
◆**記録**　:黒田記代

果無山脈は紀伊半島の南部を東西に横たわる山脈で、西端の行者山から果無峠と続いて十津川の流れに没する。最高峰は冷水山で、和田の森から安堵山、冷水山に登り十津川に越える道は果無越えとよばれる古道です。

大峰山系を登り初めた 10 年ほど前に、果無(はてなし)山脈という名前を知り、字と音にあこがれ続け、何時かこの山脈の西から東までをト

レースしたいと思い焦がれつつ、そのチャンスがありませんでした。

今夏、チャンス到来。良き山仲間と歩く機会が得られ、日程の都合上、とりあえずメインの果無峠越えの古道を歩くことにしました。

紀伊田辺駅から小森の集落の果無峠越え入口までタクシーで向います。1 時間半以上かかってやっと到着。

一般登山道であるとはいえ、地方のメジャーではない山域なので、道がどんな風になっているか不安を抱きつつ出発。ガイドブックには、10月中旬から下旬の紅葉、冬枯れの3月ごろがベストとあるのを、どうしても早く行きたくて、7月に決行。

やぶこぎを覚悟で行ったところ、案の定笹の仮払いはしてあるので、登山道ははっきりわかるけれど、人があまり通らないので、背丈ほどに伸びた笹薮を泳ぐようにして通過しなければいけない所が何箇所もありました。

樹林帯の中の快適な山歩きと薮漕ぎを何度も繰り返しやっと冷水山山頂に到着。幾重にも幾重にも重なる山また山の眺め。これが熊野の山の特徴です。

あまり広くはない山頂にツェルトを一人づつ張って寝ました。赤橙色の夕焼けを見ながらの夕食は、感動、ステキでした。忘れられない夕焼けの色です。言葉で書くのは難しい色です。

2日目。4時起床。5:30 果無峠を目指して出発。

ほとんど樹林帯の中の歩きで快適なんですが、時々日向に出るとかんかん照りで暑い。昨日はちょっとひやこかったので歩きやすかった。

やっと果無峠着。ここまでは、ほぼ果無山脈の稜線上を歩いてきたのですが、果無峠で登山道は左右に分かれていて、稜線上からそれます。この先登山道を離れ、稜線をたどって山脈が十津川に没する所まで行きたかったけれど、時間切れで、このまま登山道を十津川温泉方面に下山することにしました。

果無峠から十津川温泉への道は、熊野古道小辺路ルート（世界遺産登録）の一部分に当たります。冬枯れの暖かい日に行くと気持ちのいい山歩きが出来ること間違いなしです。

【行程】

7/18 紀伊田辺駅タクシー～小森の集落・果無越え入口(11:50)～和田の森(14:00)～安堵山(16:00)～黒尾山(17:30)～冷水山(18:05)

7/19 冷水山(5:30)～樫尾森山分岐(7:00)～ミョウガタワ(9:00)～ブナの平(10:00)～石地力山(10:30)～果無峠(11:30)～十津川温泉(14:00)

7月24日（土）

丹沢玄倉川／女郎小屋沢

◆**メンバー**：伊藤幸雄(L)、横川秀樹（SL）、南谷やすえ、渡部吉実

◆**記録**　：渡部吉実

新松田駅に8時20分頃全員集合し、2台の車で小川谷林道分岐を目指す。

玄倉川沿いの道を進むとこの日照り続きで居たたまれなかったのだろうか、ひかれたヘビを3匹も見かけた。

小川谷林道の終点に1台、林道分岐に1台車をデポし10時過ぎに林道を歩き出す。50分くらい歩くと境ずい道をすぎ、三保猟区とかいう看板が目印でこれより本流へ降りて沢支度を整える。目の前が玄倉川と女郎小屋沢との出合いで、念のため遡行図にある「左に堰堤がある沢を見送る」ことを確認し11時5分に遡行開始。

白い砂、青い海というのは嘘ですが、砂が真っ白で水も透明。逃げ惑うヤマメの姿があたかもスクリーンに映しだされた影のような感じで面白い。二つ、三つ堰堤を越えると砂泥質の小滝が懸かる。非常にもろい。「この先岩質もろく滑りやすい」と暗示をかけられているようだ。

さて女郎小屋沢という名前、むかしこのあたりに金山や鉱山があり栄えた時代に遊郭でもあっ

たのだろうか。その気配は全く無い。何をもって女郎小屋沢と名付けたのだろうか、不思議だ。

滝のほうはF7 野猿棚が記憶にあるだけで他の記憶が無い。その野猿棚は 10mの滝が 4 つあるという感じで区切れている。

1 段目、2 段目とほぼ順調に越えた勢いで南谷隊長、渡部の 2 名は 3 段目に突入するも滝の落ち口が少しいやらしく、セミとなってしまった。

狭いビレイスペース、打っても効かないハーケン、そのような悪条件下で幸雄さんにリードしてもらい事なきを得たが、岩修行がまだまだ足りないと反省。

その上の 4 段目も左側がヌルヌルしていて滑り易そうで、右は小さなルンゼとなっているがあまり良くなさそう。ここを左から横川さんが全体の 3/4 くらいまで登ったところでまさかの小滑落、下でビレイしていた幸雄さんをなぎ倒す形で二人とも止まり事無きを得た。横川さんは掴んだホールドが欠けてしまったようだ。

二人とも下の段まで落ちていたらヘリ出動だったかもしれない。気を取り直して右の小ルンゼを幸雄さんがリード、次に南谷隊長が登ると小落石発生、横川さんこれをゴールキーパーのごとくナイスキャッチした。

その後、伏流となると、沢幅が狭くなり涸れ沢に大きなチョックストーンを掛ける沢となる。ところどころ残置シュリンゲに助けられたものの乗っ越すのにかなり体力消耗する。

最後の女郎小屋乗越しも通常どおり沢を詰めると登山道が横切っているのかと思いきや、ひと蹴りで壊れてしまいそうな砂泥質のコルで向こう側も沢の源頭となっていて立ち木に残置シュリンゲが懸垂下降用にあった。これを利用し東沢側に下降し丹沢を象徴するような崩壊しきった沢を降りていく。

周りを見回してもこれといって大きな木が無い。別に豪雪地帯でもないこの山域に大木がないのは、少しの雨が降っても沢筋の地質がもろいため木が根こそぎ倒されてしまうためだろう。

東沢に入り更に下降すると何本かの沢を合わせ、最後に小川谷廊下の上流部に着き沢装備を外し、これまた崩壊した登山道を辿り小川谷林道終点の駐車場に着いたのは 17 時 35 分だった。

何度かハプニングがあったが大きな事故にならずに良かった。西丹沢の沢は初めてだったが奇麗な反面、人があまり入っていないようでもろく、ホールドのコンディションも良くなかったなか、幸雄さん、横川さん、南谷隊長、お疲れ様でした。また沢集中をやりましょう。

【行程】
小川谷林道分岐(10:05)～女郎小屋沢出合(11:05)～女郎小屋乗越(16:00)～小川谷林道終点(17:35)

7 月 25 日(日)

丹沢玄倉川／モチコシ沢

◆メンバー:伊藤幸雄(L)、横川秀樹(SL)、渡部吉実
◆記録　:伊藤幸雄

沢集中 2 日目、昨日の女郎小屋沢に引き続き玄倉流域のモチコシ沢を計画した。

レベルとしては 2 級上、難度的にも他の沢より高めであり時間も掛かりそうなので早めの出発とした。

朝 6 時に小川谷講習組である南谷さんの車でユーシン林道のゲートまで送ってもらい、そこから歩きで約 50 分。二つ目トンネル手前左側に「モチコシ⇒」の表示を見つける。

そこから玄倉川に降りて約 10 分上流に登ると左側に狭いゴルジュ状の沢が現れる。ここがモチコシ出合である。

ゴルジュを渡り始めるとゴーゴーと滝の音が聞こえ始め、見上げると大きな滝が前方を塞いでいる。自然に「おーおー」と声がでる。玄倉川最大の 2 段 60mの大滝である。

「朝一からこれを登るのか」と思うとちょっと尻込みしてしまい、しばし呆然と見上げる。

濡れるのでカッパを着始めた横川さんに、「リードやる？」と誘い水をかけると「じゃーやります

か」とやる気満々。その気を大事にしなければと思いお願いすることにして、自分はビレイ用のハーケン 2 本を打ち込んで安全確保。

まずは下段 35mに挑戦。水流左を登り始めるが、残置ピンが見当たらずシャワークライムをしながらの奮闘がつづいた。リードの横川氏はビッショ濡れ状態。しかし、ちょっと左横の草陰に目をやると、そこにはしっかりした残置ピンがあるではないか・・・・ご苦労様でした。

下段で相当神経もつかったこともあり上段 25mは巻くことにした。右側から巻くが、急勾配の崩れやすい草付きでこれまた神経をつかってしまった。

大滝を巻くとすぐ F2(8m)が現れる。今度は自分のリードで右から登り、二俣に出る。左本流を進みゴルジュの中にある 3m、F3(5m)、F4(6m)の滝を連続して登る。

小滝を越えて F5(7m)につづく、遡行図では水流をまたいで登るように記載されているものもあるが左側から直登できる。

F6,F7(5m)の滝を越え、ゴルジュを過ぎると右側にスラブ岩壁のような滝が現れる。ここが奥の二俣で一見そのまま真っ直ぐ沢沿いに行きそうになるが、右に入る。

右に入るとモチコシ沢2番目のポイント、沖ノ悪場 F8、F9、F10 の連続滝がある。

F8 は左から廻り(直登は無理)、F9(12m)は水流右側を直登、意外と高度感もあり残置ピンはたくさんあるので気分よく登れる。

F10(18m)は右側から中段テラスに登り左から直登するがスラブ状でスリップする。フリクションをつかって何度か挑戦するも滑り落ち、結局 A0 でジワリジワリ登った。

あとは水量も減ってゴーロ状になりそのまま沢沿いを詰め、最後は右側の小尾根を登り、モチコシノ頭に抜けた。時刻 14 時 30 分

モチコシの頭から北に踏み跡をたどり東沢乗越を過ぎ東沢を下り小川谷沢に合流。そのまま小川谷林道を下ると一段と騒がしい小川谷沢講習メンバーに遭遇した。16 時小川谷出合に到着。

モチコシ沢はやはり登攀力を必要とする部分が多く、滝を登る醍醐味は充分味わえると思うが、登るルート設定を誤ると身動きできなくなる。ルート設定を慎重に決めること。また、ビレイ点が意外と少ないのでハーケンを何度か打ち込んだが(ビレイ後回収)登攀性のある沢には絶対ハーケン、ハンマーが必要。また打ち込んだハーケンの効き目を充分確認してから身を預けないと抜けることもあるので要注意！

【行程】
ユーシン林道ゲート(6:15)～青崩トンネル(7:05)～モチコシ沢出合(7:25)～奥の二俣(12:00)～モチコシノ頭(14:30)～小川谷出合(16:00)

◇Mt.Book ①◇

「高熱隧道」(新潮文庫　吉村昭著)

昭和 42 年刊行とずいぶん古い本であるが、今回剱合宿に参加するにあたり黒部周辺のことを知ろうと読んでみた。

昭和 11 年～15 年にかけて、欅平から上流仙人谷までの黒部渓谷において黒部第三発電所の電源開発工事が行われた。岩盤最高温度 165 度という高熱地帯に隧道(トンネル)を掘削するという、度重なる悲惨な事故による犠牲者 300 余名を数えるほどの難工事の中で、隧道貫通への情熱と執念にとり憑かれた男たちと大自然の猛威とが対決する異様な時空を、綿密な取材と調査で再現した記録文学。

(研究生　YAMANO)

お知らせ

原稿の宛先

月刊岩小舎の原稿は、下記までお願いします。

講習山行⇒山野美香

自主山行⇒福田洋子

同人便り⇒坂口理子

今月の一言⇒横川秀樹

メールアドレスがわからない場合は、

sanjc2004@yahoo.co.jp までお問い合わせ下さい。

長谷川カップへの道(その 1)
～無名山塾チーム(松本・横川・浅村)編～

10 月 10 日(日)に行われる「日本山岳耐久レース 長谷川カップ」に、無名山塾(講師・同人・研究生・本科生)より総勢7名が参加予定です。
(チーム参加は「無名山塾チーム(松本さん・横川さん・浅村さん)」、「無名山塾技術委員会チーム(金沢さん・日浅さん・南谷さん)」、個人参加は福島さん)
4 回連続出場の人あり、初出場の人ありとさまざまですが、今回は「無名山塾チーム」のメンバーに、次の 2 点を伺ってみました。

①長谷川カップへ向けてのトレーニング
②目標タイム

◆松本さん:①皇居ランニング(ランニングの途中で片足スクワットを腿が張ってくるまで続ける)
②12 時間 30 分代
◆横川さん:①槍～西穂／日帰り、親不知～白馬／1 泊 2 日
御殿場口～富士山往復／半日
②13 時間 59 分
◆浅村さん:①週 2 回ジムにてランニング(30 分×1 本、15 分×1 本:マシン 15km/h に設定)
同コースを走る。
②去年の横川さんのタイムを抜く！

気合・闘志が伝わってくる目標タイムですね。
応援団結成の噂もあるようです。皆さん無理せず持てる力を出し切って下さい。くれぐれも怪我のないように。

****
■こちら技術委員会～講師/金沢和則～
****

「待つ」

暑い・・・ビアマウントにいこう。

遅めの朝。五日市駅から市道山そして高尾山へと向かう。メンバーはＫとＭとＳ。
エアリア範疇のコース。山をなめているわけではないがこのメンバーなら問題になるところはなかろう。それぞれのペースで適宜いこうと途中一・二ケ所ポイントでの顔合わせ以外は単独行の三パーティ！？。
時々走り？！ながら夕暮れ近くちょうどいい時間に高尾山ビアマウント。

「いやー混んでるねー」 そこはケーブルで上がってくる人の山。さすが雑誌「日経おとなのOFF」に掲載させるくらい営業に力入れているだけのことはある。整理券が配られ 1 時間待ちとのこと。待つのが嫌いな K は即「高尾の駅前だって飲み屋はある」。一気に下山。高尾駅前にしちゃ小洒落た(失礼)お店で乾杯。これがいいんだな(笑)

そういや『イーブンな関係でいけることを目指して』なんてこと話したっけ、最初のころの技術委員会で。ところでロープ(ザイル)を使うようなルートでの複数チームでの場合ってどうなんだろう。たとえば自主計画で二人ユニットが二組。同じ計画の同一パーティだ。先行はガンガンいけるメンツ。後続も別に心配はない。多少場数が少ない程度。
状況として、天候は順調、行動も時間的に切

迫した状況ではない。では先行はガンガン終了点まで先にいってしまっていいのか。悩むところだ（悩まないか？）。
　何事もなければいいけれど。何かあった場合は・・・などと考えるとチーム間はワン・ピッチ下降できる程度以上は離せなくなる。というかそう思ってしまう。

『そんな負担なこと考えなきゃいけないこと自体イーブンな関係じゃないのでは』という意見もある。確かにそうではあるが、それがいつでもそうかというと、そうではない。

　ここに、
『わらじの仲間』の月報記念で『沢登り技術メモ』というのかある。これはリーダー会員が作成した沢登りの基本技術やトラブル対処法・遭難対策などを編集した読本のようなものだ。基本的な遡行技術についての項目の最後に『パーティで遡行する場合、時々後続がついてくるかどうか確認する。後ろがリーダーといえども、どこでズッコケルかわからない』というのがある。

　沢と岩壁（岩稜）・オーダーはちがうにしても、イーブンな関係って相手を信頼してるから放っておくことだけじゃなく、ダメなときはダメと伝えることや、また相互で援助（交際じゃない）などが平易にできる関係と共に、さりげなくの配慮もイーブンな関係ではないかと思う。パーティとして来てしまった以上、終了までの展開を考えた行動でいかないと『なかなか上がってこないね』でずっと待っていても、実は後続はトラブっていて動けない。そんな時、そこまで何ピッチかの下降で戻るというのは実は大変な作業だし、そもそも状況もわからない。その手前で『未然に防げる対処があったかもしれない』なんて後から考えるよりは、少しめんどうくさくても途中で待って様子を見るとかね・・・

『残雪期の鹿島槍ケ岳東尾根』でこんなことがあった。

　雪稜に続いて岩塔が現れる。ルートの核心部分だ。下から見えていた先行はかなりの人数。それぞれふたりがロープを組み、リードとセカンドで登っている。それはそれでいいのだが、人数が多いだけに僕らが基点についてもまだ残っていた。元気で若い班はガンガンいってしまったが、疲れも見える中高年班が悪戦苦闘。ランナーの取り方が少々悪く、おまけにセカンドも疲労困憊でその処理にパニックしている。ロープを引くこともできず、登ることも進まない。『このままじゃ日没間近かなのに、こっちが遭難しちゃうよ』と思いつつ、ついに待ちきれず追い越しをかける。あ、もちろんパニックしているチームのフォロー（講習？）も忘れずにですよ（笑）。

　先行集団のはやい班はすでにテントに入ってしまっていたが、僕らは追い抜いた勢いと月夜なので！？さらに足を延ばし、ピークを越えテント設営で一息。

『先行さん班の組み立てが悪いよな、元気なのが先にいってしまい後続のフォローをしていかないで・・・』などといってみたが、善意に解釈すれば、後続は信頼されていたけれどたまたま不調だったのかも。
　それでも何かある。そんなことを察知できなかった、状況をつかめていなかった。これはある意味、先にいった班と後の班がイーブンな関係ではなかったのかな・・・

　ま、先行にしても、いつもいつも気にしていたらリズムも崩れるし、『甘やかし過ぎだ』なんて。後続にしてもいつもいつも気遣われていると『小さな親切大きな（余計な）お世話じゃ』（笑）
　そんなときは『ガンガンいってよ』とか『先にいっちゃうからねー』とか言えばいいんだよね。それがイーブンの始まりだから。

　そのあたり、タイミングを察知するのはなかなか大変なのかな・・・
色々考えてしまうと・・・

「ね、どうしたの。ボ～ッとして。ビールグラス空いたままだよ。」
「・・・あ、ほんとだ・・・考え事してた。めずらしく（笑）」
「スミマセ～ン。ギネスひとつお願いします。」

■□■□　編集室だより　■□■□

三人兄妹の末っ子として育った私は子供の頃、二人の兄が友達と缶けりや鬼ごっこをして遊ぶ時にはいつも自分も仲間に入れてもらい、兄やその友達の背中を必死になって追いかけていました。そしていくら頑張っても追いつかなくて心細くなり戸惑っていると、誰かが戻ってきて手を引いてくれたのです。

今回のヌク沢自主山行の時、なぜかそんな昔のことを思い出していました。

子供の頃はそれでよかったのかもしれない・・。「パーティーのメンバーはイーブンな関係であるべき」「リーダーシップとメンバーシップ」・・・

男性と女性では体力・筋力に違いがあることは否めず、たとえば装備の分担などでは差が出ることはやむを得ないのか？　歩くスピードや技量などを考えても、イーブンな関係というのは有り得るのか？（これは私を基準に考えた場合です）。

もちろん秤となるのはそれだけではないかもしれません。形では表せないメンタルな部分や他にもいろいろあるのでしょう。そのどれをとっても、助けられている自分をいつも感じている。そしてそう思うということは、自分がメンバーに頼っている・甘えているということになるのでは　と。

子供の頃と同じように、前を行くメンバーを必死になって追いかけている自分が見える・・。

自分に足りないものはなにか、この先それから逃げずに向かっていくことが出来るのか。頭の中をいろいろなことがめぐり、答えをなかなか見出せないままそれを抱えてまた山へ。

真っ直ぐに走り続けている彼方へ・・
迷うことはないのでしょうか。恐くて足がすくむときはないのでしょうか。そして立ち止まり、休むことは・・・。

近頃こんなに真剣に物事を考えたことがあったでしょうか 。あ、これってもしかして「山は哲」・・とは違うかな？

（m）

～*～*～*～　8 月の一言集　～*～*～*～

◆いや～、暑い・暑い！猛暑連発の7月でしたが、沢の山行連発で、身体にはいいかも～。今の所、夏バテ無し！皆さん、暑い時は健康の為にも沢！（久野）

◆8月のランニング目標：200km／月。でも暑くてなかなか困難・・・じゃなくて、暑気払いが多くて(-_-;)（松本）

◆ヌク沢の大滝 2 段目。左を行くべきか、真ん中か、それとも右か。いまでも悩んでいる。いつかリベンジするぞ！（山野昭）

◆針ノ木～烏帽子の縦走で、初めて家を 5 日間も留守にしました。帰ったら子供 3 人痩せていました・・・・。（阿出川）

◆あっという間に7月も終わる。7月のハイライト山行は〈針ノ木～烏帽子〉の縦走だった。反省多すぎの山行だった。でも、これでまた少し成長できたみたい。(YUI)

◆奥多摩の、山の中、熊さんに、出会った、スタコーラサァッサッサッのサァー、スタコーラサァッサッサッのサァー（FUKU）

◆夏祭り、花火大会・・・いろいろあって楽しいけれど、車での山の帰り、渋滞が怖い（笑）（kanazawa）

◆御殿場口から富士山へ。山頂直下 3500mぐらいの地点で足が動かなくなり撤退。下山時、富士登山駅伝のランナーたちとすれ違い大いに刺激を受けました。（横川）

◆永年のあこがれルート。講習会やガイド登山ではなく、自分達の力量で行く自主山行。山仲間がいるっていいな～。（kuroda）

◆「沢をあきらめて」しまいそうだけど、もっと慣れたい気持ちはあるのさ・・・。擦り傷、青あざも愛しい！（斉藤）

◆高尾山のビアガーデン、大盛況で何より。しかし、武蔵五日市から歩いて来た我々に、整理券発行という過酷な試練。あと1時間も生ビールおあずけなんて……ああ無情。（R子）

◆暑い夏、でも沢は涼しい事を知りました。（松永）

◆岩登りは私にとって“格闘技”。未熟である為腕力に頼り、その腕力も筋力不足で　手・腕・肩　の筋肉がパンパンに。とにかく疲れる。いつかきっと・・・・。（福島）

■7 月の山行一覧

	種類	場所	日程	メンバー	記録
1	講習	岳嶺岩／ A1 クライミングを学ぶ会	7/3	小林,平林,向原,伊藤幸,横川,山野昭、久野 山野美,伊藤由,南谷,伊藤栄,阿出川,斉藤 伊藤稔,福島,田中	阿出川
2	講習	岳嶺岩周辺／ 夏山サバイバル訓練	7/4	金沢,工藤,矢田,松本,沢口,坂口,伊藤幸 横川,山野昭,久野,伊藤由,福田,山野美 南谷,日浅,伊藤栄,阿出川,黒田,伊藤稔 福島,田中,浅村	黒田
3	自主	藤坂ロックガーデン RCT	7/10	伊藤幸(L),伊藤栄	伊藤栄
4	自主	笛吹川東沢／ヌク沢左俣	7/10	横川(L),田口,山野昭,山野美	山野美
5	自主	笛吹川東沢／鶏冠谷右俣	7/11	横川(L),田口,山野昭	横川
6	自主	奥多摩北秋川／惣角沢	7/11	伊藤栄,渡部,伊藤幸,南谷	伊藤栄
7	自主	北穂高岳 東稜	7/17-19	横川(L),田口	横川
8	自主	奥多摩北秋川／ シンナソー・ヒャマゴ沢	7/17	伊藤栄(L),久野,南谷,福田	福田
9	自主	奥多摩北秋川／水ノ戸沢	7/18	伊藤栄(L),伊藤幸,南谷,福田	福田
10	自主	丹沢四十八瀬川／ 勘七ノ沢	7/19	伊藤栄(L),伊藤幸,南谷,久野	久野
11	自主	南紀／果無山脈縦走	7/18-19	黒田(L),阿出川,斉藤	黒田
12	自主	丹沢玄倉川／女郎小屋沢	7/24	伊藤幸(L),横川,南谷,渡部	渡部
13	自主	丹沢玄倉川／モチコシ沢	7/25	伊藤幸(L),横川,渡部	伊藤幸
14	講習	丹沢／水無川本谷下部 沖ノ源次郎沢	7/24	工藤,伊藤由,日浅,阿出川,小林幸,伊藤栄 斉藤,伊藤稔,浅村,福島,池田,松永	池田
15	講習	丹沢玄倉川／小川谷廊下	7/25	工藤,小松,南谷,久野,日浅,小林幸,伊藤栄 斉藤,伊藤稔,浅村,田中,福島,池田,松永 みどる 1 名	浅村

月刊 岩小舎 9 月号の予定

(2004 年 9 月 15 日発行)

【掲載予定】

□講習山行

夏山合宿／剱岳

長次郎谷・八ツ峰下半部

赤石沢～赤石岳

□自主山行

八ヶ岳／小同心クラック

北穂東稜～奥穂～西穂縦走

夏山合宿／剱岳

源次郎尾根・チンネ左稜線・竜王岳東尾根

早月尾根～北方稜線

和名倉山ニ瀬尾根

奥多摩日原川／日陰名栗沢

丹沢中川川／鬼石沢

野麦峠～乗鞍岳

奥多摩大丹波川／真名井沢

奥多摩日原川／小雲取谷

☆原稿は 9 月 5 日締め切りです。

発行 無名山塾(埼玉県山岳連盟所属)
住所 東京都豊島区南大塚 1-39-2-1F
電話 03-3941-3481
FAX 03-3941-3482
HP http://www.sanjc.com/
編集長 山野美香
編集部 坂口理子・福田洋子・横川秀樹

□机上講座の予定

(於:豊島区立勤労福祉会館 19:00～)

8 月 26 日(木) 「山の天気と気象遭難」

9 月 30 日(木) 「読図とルートファインディング」

10 月 28 日(木) 雪山入門-1「装備と服装」